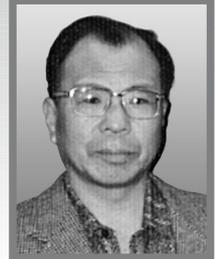


# 追悼



故 井田邦弘 会員 (11期)  
2009年8月12日逝去・83歳  
1976年度東京弁護士会副会長

## 井田邦弘さんと万葉集の会のことなど

会員 金子光邦 (19期)

井田さんといえば「万葉集を読もう会」。

その井田さんが8月12日に亡くなられた。

戦前の皇国史観に彩られた万葉集に対し、戦後、結核療養中に、民衆の愛の万葉集を再発見して、離れられなくなったとお聞きした。

その会は、1981年から始まったが、朝日新聞「こころ」(1985年1月8日)・日経新聞「文化」(2001年5月21日)の欄などでとりあげられてから、一般市民の参加を得て、大きく発展した。今年の1月まで30年近く、一時中断はあったが、毎月大勢集めて井田さんの講義、国内外(韓国・中国)の旅行が続いた。1000年以上も昔の世界を、いまのことにやさしく縦横に解説して下さり、その話を聞いてから、またそれを肴にして、ワイワイやるのも楽しみのうちだったが、それがもう聞けない。

われわれ弁護士は、とかく目の前の事件にとらわれて、仕事の幅はせいぜい弁護士会活動に止まり、市民の中に入って文化活動を続けるという例はめずらしい。そこには、井田さんの弁護士のあり方に対する信念があったものと思われる。

東弁副会長(1976年)のとき、会の広報体制の基礎を築き、初代広報委員長に就任したのも、同じ考えであろうし、もとの東弁新聞「こんぱす」欄に、創刊以来毎号(250回以上)、司法とその周辺の問題を幅広く、平易に説き続けたのも同趣旨と思われる(こんぱすは、東弁職員の手によって「井田邦弘エッセイ集」として2冊にまとめられている)。

1986年の日弁連会長選挙は、大方の予想をくつがえして、北山六郎氏(神戸)がもの見事に当選したのであったが、この選対を担ったのは、邦弘さんと恵子さんの一家が中心だったということも忘れられない。北山執行部の2年間でふり返ると、井田さんが事務総長をやるべきであったと、悔やまれてならない。もっとも、その4年後恵子さん(10期)が中坊公平会長の下で女性初の事務総長を務めたが、任務終了後激職に殉職されてしまったことは、井田さんにとってどれだけ痛手になったか、想像を絶するものがある。

趣味は、テニス、山登り、スキーなど多才であった。

今はもう、「ゆっくりお休み下さい。」というほかはない。  
(2009. 11. 5)

故 多賀健三郎 会員 (6期)

2009年9月2日逝去・82歳

1975年度東京弁護士会副会長



## 故 多賀健三郎先生を偲んで

会員 正野 建樹 (25期)

イソ弁として勤務先事務所を探していた私に、司法研修所民事弁護教官関口保太郎先生から「多賀健三郎先生を紹介するので、一度事務所を訪ねてみるとよい」と勧められ、虎ノ門の弁護士ビル二号館7階にある「多賀健三郎法律事務所」の門を叩いたのが、昭和48年初頭のころであった。その際、初めて多賀先生にお目にかかった時のことが、つい最近のこのように想起される。その時、先生は弁護士のあり方をひとしきり話して下さった。先生としては一つの訓辞のつもりであったのでしょう。一つ、弁護士の要諦は、依頼者の話しをじっくりと聴くことである。一つ、相手方との折衝は勿論、裁判所職員との対応、あるいは依頼者との関係において、怒ってはならない、「怒ったら負け」と心得よ。一つ、どんな小さな事件でも依頼者にとっては重大事であるので、丁寧に処理すること、等々。大学出たてで、社会に出たことのない私にとって、聴くことすべてが新鮮であり、驚きでもあり、乾いた砂が水を吸い込むように心にしみ入ったものでした。

多賀先生は、日ごろから「私の趣味は、ゴルフや麻雀等ではない。東京弁護士会とその会派(法曹大同会)の仕事が趣味である」といって憚らなかった。公言するとおり、先生は、東京弁護士会と法曹大同会の仕事には情熱を傾けてお

られた。先生が東京弁護士会副会長に立候補された時のこと、同じ会派から著名な弁護士も立候補の意志を表明されたことから、派内において熾烈な予備選が展開された。知名度からいえば某弁護士の方が勝っていたが、日ごろの多賀先生の尽力を知っている派内の特に若手弁護士の熱い支持を得たことから、先生は予備選、そして本選挙と勝ち進んだのであった。当時は、東京弁護士会役員選出は激しい選挙戦となったのも、今は懐かしい思いがする。

多賀先生は、東京弁護士会においては、副会長、常議員、日弁連機構改革推進特別委員会委員長、司法制度臨時措置委員会副委員長等々、日本弁護士連合会においては、理事、人権擁護委員会副委員長等々、関東弁護士会連合会においては、常務理事等、裁判所関係においては東京家庭裁判所調停委員等々数々の要職を歴任され、まさしく法曹界においては八面六臂の活躍をされた。

多賀先生は老いてなお熱血漢であり、その気力を支えてくれる体力と健康に恵まれていただけに、パーキンソンの病魔にさえ襲われなければ間違いなく100歳まで現役弁護士として情熱をもちつつ全うされたであろうと思うと残念でならない。

先生のご冥福をお祈り申し上げます。